秋の夜長に軽い気持ちで ブックスタート

私たちにとって読書とは何でしょうか？
私たちは、子どもの頃から本に接し、親しみ、
多くのことを学んできました。
そして、今では、学校や図書館、書店など
いろいろなところで本と出合うことができます。
テレビやインターネットが普及し、
情報が溢れている今でも、
本を手に取る人が後を絶たないのは、
きっと本に求める、本が与えてくれる
何かがあるからでしょう。
そこで今号では、なぜ本が読まれるのか、
読書が勧められるのかを知り、
本の魅力を再発見します。

感動は心の扉を開いてくれる。本は感動を与えてくれる存在です。

永田敏夫さんは、毎週のように市立図書館に通い、月に20冊の本を読む大の本好きです。

そんな永田さんと本の出合いは小学校入学前。近くの貸本屋で本の魅力を知りました。「絵本を夢中で読み、母から読み聞かせをしてもらったのです」。永田さんはそれから本の虫になったと言います。

そして、永田さんが大学に入学時、人生に大きな影響を与える本と出合います。それは哲学と思想に関する本。「高校生まで、自分のことで精いっぱいでしたが、もっと積極的に社会に目を向け、自分がどうあるべきかを考えさせられた」と振り返ります。

そして、「みんなの力と知恵で問題を解決できる子どもを育てたい」と小学校の教員に。教え子には、具体的に本を紹介しながら、その素晴らしさを伝えてきました。一年間だけの教え子でも、本が好きになった子どもは多いそうです。退職した今でも、成長した教え子から「先生のおかげで本が好きになった」、「また読み聞かせをしてほしい」と手紙が届いたり、直接会いに来ることをうれしそうに話してくれました。

「私は本と出合って人生が変わりました。感動は心の扉を開いてくれます。本はその感動を与えてくれる存在です」と話す永田さん。そしてこう続けました。

「読書は、時間も場所も選ばない。その時間を有意義にしてくれ、感動した本は何度でも読めます」。

おすすめの一冊は、有川浩著「阪急電車」。「現代の小説は、読みやすく共感できることが多い」と優しい笑顔で話してくれました。

永田（ながた） 敏夫（としお）さん（70）

私の1冊

『阪急電車』
著者：有川 浩

TOPIC

小林市立図書館おすすめ年齢別に読みたい本

お腹の中から高年期まで。
本はいつでもそばにあります。